The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国人大学生社会的スキル尺度（ChUSSI）の短縮版作成の試み
Author(s)	毛, 新華; 大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2018, 18, p. 113-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70548
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国人大学生社会的スキル尺度(ChUSSI)の短縮版作成の試み

毛　新華（神戸学院大学人文学部人間心理学科）
大坊　郁夫（東京未来大学モチベーション行動科学部）

社会的スキルは人々が他者と円滑に対人コミュニケーションを展開することができるかどうかに関わっている。そのために、社会的スキルを測定する尺度の存在が重要である。先行研究では、様々な尺度が開発されている。その中の一つとして中国文化社会的スキルを測定する中国大学生の社会的スキル尺度(Chinese Univesity-students Social Skill Inventory：ChUSSI)がある。本研究では、この尺度の短縮版を作成することを試みた。中国人大学生 406 名のデータを分析の対象とし、ChUSSI の 4 因子から因子負荷量の高い 4～5 項目を抽出し、確認的因子分析を行った。その結果、「相手の面子」、「社交性」、「友人への奉仕」、「功利主義」という 4 因子の成立を改めて確認することができた上、相対的に高い適合度を示す指標を得ることができた。この適合度は、ChUSSI 短縮版を構成している因子の理論的根拠を示した。また、短縮版尺度の各因子の Cronbach のα係数や再テスト法の相関係数の確認によって、尺度の信頼性を検証した。さらに、各因子と既存の社会的スキル尺度との相関関係も検討し、尺度の併存的妥当性と弁別的妥当性を確認した上、尺度の個人特性との関連からも尺度の妥当性を確認した。以上のことから、本尺度は、信頼性・妥当性を共に備えた尺度であると考えられる。

キーワード：社会的スキル尺度、中国人大学生、文化、確認的因子分析

問　題

相川(1996)は、社会的スキルを「対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的、非言語的な対人行動と、そのような対人行動の発見を可能にする認知過程」と定義している。社会的スキルは、近年、教育現場、産業現場など幅広い分野において、その有用性について、ますます重要視されている。その理由としては、何より、社会的スキルが他者と円滑に対人コミュニケーションを展開するのに役に立つものであり、人々の社会生活への適応(大坊, 2003)や人間関係のストレスの緩和（田中, 2003）、生活の質(quality of life)の向上(皿田, 2003)などに重要な役割を果たしているためである。逆に、社会的スキルが不足すると、孤独感や抑うつ、さらにうつ病などの精神疾患を引き起こす可能性もある(相川, 1992；相川・藤田・田中, 2007)。

そのために、社会的スキルが不足している人を見出して、社会的スキルの性質の一つである「向上可能性(生まれつきではなく、学習によって身についていく)」を利用した社会的スキル・トレーニングを施し、このような人に社会的スキルを身につけさせる必要があると考えられる。大勢いる人々の中から、社会的スキル不足者を見出す評価方法として、これまでに、「他者評定法」や「自己評定法」(相川, 1998)など、さまざまな方法が開発されている。このうち、「自己評定法」は、対象者自身が自分の行動傾向を、質問紙を通して回答する方法である。具体的には、研究者が研究対象となる領域をカバーするような心理尺度を構成し、回答者の自己評定に基づいて社会的スキルの有無を決定していく方法である。この方法は、簡便で経済効率が高く、適用範囲が広いなどの利点により、現在では最もよく用いられる測定方法となっている。

社会的スキル尺度を構成する内容は、焦点が当てられた場面や研究者の考え方によって異なる。中でも、社会的スキルが対人コミュニケーション場面に多く使用されていることから、「表出」・「解読」といった内容がしばしば、コミュニケーション観点の尺度に盛り込まれる。例えば、Friedman, Prince, Riggio, & DiMatteo(1980)はコミュニケーションにおける感情表出の視点から、Affective Communication Test(ACT)作成している。日本では、堀毛(1991,1994a)はコミュニケーションの記号化と解読の過程に注目し、ENCODE-DECODE(ENDE)尺度およびその短縮版 ENDE2 尺度を作成している。また、測定内容は、測定対象の発達段階に応じて設定されており、児童・生徒用のもの(藤枝・相川, 2001)や若者用のもの(菊池, 1988)などがある。このうち、菊池(1988)の若者の社会的スキルを測定する尺度として、KiSS-18を開発し、18 項目で若者の「関係開始」や「感情処理」、「ストレス処理」などの基礎的なものから高度なものまで、社会的スキルの幅広い度合いを測定している。

さらに、よく使用されている尺度の中には、ある文化において開発された後に、翻訳され、他の文化に適用されたものもある。前出した ACT という尺度は、日本、中国、韓国(大坊, 1991；上出・大坊・村澤・趙・毛・高橋, 2007)などにおいて、しかるべき検証手続きを経て、適用されている。このような適用を通して、社会的スキル研究の通文化的な発展に貢献している一方で、尺度によっては、尺度適用時の文化的等価性(Hui & Triandis, 1985)の問題(概念的・機能的等価性、構造的等価性、項目の等価性、および尺度の等価性)が問われることもある。Ota,

Takai, & Tanaka(1993)によると、海外で作成され、日本語に翻訳されて使われている尺度よりも、日本の特有の文化に基づいて開発された尺度の妥当性がより高い。これまで、日本においては、文化の妥当性という観点から開発された尺度として、堀毛(1994b)の人あたりの良さ尺度(HIT-44)や Takai & Ota(1994)の日本的対人コンピテンス尺度(Japanese Interpersonal Competence Scale：JICS)などがあげられる。このうち、JICS は、日本人の対人的能力を、間接的メッセージを認知する能力に関する「察知能力(Perceptive Ability)」、本当の感情を隠し、自己主張を抑える「自己抑制能力(Self-Restraint)」、目上の人との適切な相互作用ならびに言語使用に関する「上下関係への調整能力(Hierarchial Relationship Management)」、感覚的メッセージの操作に関する「対人感受性(Interpersonal Sensitivity)」、曖昧な態度を必要とする相互作用スキルに関する「あいまいさへの耐性(Tolerance for Ambiguity)」という5因子にまとめられている。

一方、中国文化や中国人同士の間に特有な対人的相互作用を理解するためには、Hwang(2006)が提唱している、儒教思想の中核とされる「和」や「仁」などの概念をもとにする guanxi–mianzi モデルが有効である(園田, 2001)。このモデルは、中国における資源所有者と要請者の間のやりとりを例に、資源の要請者が所有者の面子をたてること(mianzi 志向)によって、所有者とつながりを持ち(guanxi 志向)、所有者から助けをもらう(renqing 志向)という対人的なメカニズムを説明するものである。このモデルをベースに、Mao & Daibo (2006)では、中国人大学生の社会的スキルを 4 つの因子、計 41 項目にまとめ、中国大学生の社会的スキル尺度(Chinese Univesity-students Social Skill Inventory)を作成した(以下、「ChUSSI 原版」と略す)。この尺度において、対人関係にある相手の面子を重んじる傾向を反映する「相手の面子(Partner's Mianzi)」因子は guanxi–mianzi モデルの mianzi 志向に対応している。また、対人関係において極力自分のネットワークを拡張しようとする傾向を反映する「功利主義(Connection Orientation)」因子は guanxi 志向に対応している。さらに、対人関係において他者を助けるなどの行動の傾向を反映する「友人への奉仕(Altruistic Behavior)」因子は renqing 志向と対応している。そして、個人が積極的に他者とコミュニケーションを行う傾向を反映する「社交性(Sociability)」因子の内容は Buhrmester, Furnham, Wittengerg, & Reis(1988)の Interpersonal Competence Questionnaire や日本の今野・堀(1993)が作成した「大学生の対人円滑性尺度」、菊池(1988)の KiSS-18 の一部の項目と類似している。この意味では、この尺度は文化共通の因子と中国文化特有の因子を有していると考えられる。そして、尺度開発されて以来、中国で多くの社会的スキルに関する研究に使用されている(陳, 2015;庄, 2017 など)。

しかし、ChUSSI 原版は 41 項目と項目数が多く、4 因子を構成する項目数が大きな開き(4 項目～19 項目)があり、決して使い勝手が良いとは言えない(Mao & Daibo, 2006)。そこで、本研究の第一の目的として、4 因子を構成する項目数のバランスを調整した上で、尺度を構成する全体の項目数を減らし、ChUSSI 短縮版を作成する。

また、第一の目的とともに、尺度の理論的な根拠を改めて検証することを本研究の第二の目的とする。Mao & Daibo(2006)では、ChUSSI 原版の 4 因子を構成する理論的な根拠として guanxi–mianzi モデルを挙げている。そこで、本研究では、原版と異なるサンプルを用いて、その理論の再現可能性を改めて検証する。

さらに、短縮版尺度の作成にあたり、尺度の信頼性や妥当性の検討を行う。これを本研究の第三の目的とする。信頼性の検討は、各因子の Cronbach の α 係数によって行い、再テスト法を通して尺度の安定性を検討する。また、妥当性については、既存の社会的スキル尺度との関連を検討することによって、併存的妥当性・弁別的妥当性を確認する。なお、妥当性の検討は、調査対象者の属性による得点の違いという観点からも行う。

方 法

調査対象者

ChUSSI の開発過程を示した Mao & Daibo (2006)によると、ChUSSI 原版は中国大連市で調査し、開発されたものである。本研究は、それに合わせて、中国大連市を調査地とした。大連市にある 2 つの大学で、心理学に関する授業に受講する大学生 442 名を対象に質問紙調査(以下 test と略す)を実施した。そして 4 週間後、同じ回答者に同じ質問紙を用いて調査(以下 retest と略す)を行った。retest の欠席者や test と retest のそれぞれにおいて著しく欠損値の多いサンプルを削除し、最終的に対応できたサンプルは 406 名(男子 170 名, 女子 236 名; 文系 235 名, 理系 171 名; 平均年齢 20.38±1.11)であった。

質問項目

ChUSSI 短縮版尺度に使用する項目 Mao & Daibo (2006)では、別の研究(毛・大坊, 2006)でまとめられた中国的な社会的スキルに関する記述をもとに、中国人大学生に質問紙調査を行った。そこで、41 項目から構成される 4 因子(「相手の面子」、「社交性」、「友人への奉仕」、「功利主義」)の ChUSSI 原版が得られた。本研究では、ChUSSI 原版の項目数を減らし、短縮版作成するために、4 因子のそれぞれから因子負荷量の高い順に 4 ないし 5

項目を抽出し、使用した。それぞれの項目に対して、「1.まったく当てはまらない」から「9.非常に当てはまる」までの 9 件法で測定した。

既存の社会的スキルの尺度 ChUSSI 短縮版の併存的妥当性を検討するために、Mao & Daibo(2006)でも使用した 3 つの既存の社会的スキル尺度を用いた。すなわち、若者の社会的スキルを測定する尺度(菊池, 1988; KiSS-18)、非言語的な感情の表出性を測定する感情的コミュニケーション尺度(Friedman et al, 1980; ACT)、日本人の対人的スキルを測定する日本的対人コンピテンス尺度(Takai & Ota, 1994; JICS)を用いた。JICS は、「察知能力(PA)」、「自己抑制能力(SR)」、「上下関係への調整能力(HRM)」、「対人感受性(IS)」、「あいまいさへの耐性(TA)」という 5 因子によって構成されている。ACT は、それぞれの項目に対して、「1.まったく当てはまらない」から「9.非常に当てはまる」までの 9 件法で、KiSS-18 と JICS は、それぞれの項目に対して、「1.まったく当てはまらない」から「5.非常に当てはまる」までの5件法で測定した。

個人特性変数 短縮版尺度の妥当性を確認するために、調査対象者の性別、年齢、学部、親友の数、恋人の有無の回答も併せて求めた。

分析方法 まず、短縮版に使用する項目は、Mao & Daibo(2006)の因子構造を再現することができるかどうかを確かめるために、確認的因子分析を行った。そして、各因子の信頼性を確認するために Cronbach の α 係数を確かめるとともに、再テスト法による二回の得点の相関分析を行った。さらに、回答者の個人特性(このうち、年齢は平均値を基準に、親友の数は中央値の 5 人を基準に、それぞれ高群と低群に分けた)に基づき、各因子の得点差についての有意差検定を行った。なお、本研究の統計分析は解析ソフト HAD(清水, 2016)によって行われた。

結 果

確認的因子分析

ChUSSI 短縮版の因子構造を検討するために、Mao & Daibo(2006)に照らし合わせ、test の「相手の面子」、「社交性」、「友人への奉仕」、「功利主義」の 4 因子モデルと仮定し、最尤法による確認的因子分析を行った。その結果、適合度を示す指標として、$\chi^2 = 293.99$, $df = 113$, $p < .001$, CFI = .87, GFI = .92, AGFI = .89,

Table 1 ChUSSI 短縮版尺度の確認的因子分析の結果

因子と項目	因子負荷量 F1	F2	F3	F4
F1:相手の面子				
q85 相手のことを尊重するように気をつけている。	.78			
q72 私はいつもへりくだった態度でいるように心がけている。	.56			
q75 相手の面子を潰さない。	.58			
q25 私は相手の意見を尊重する方である。	.53			
F2:社交性				
q41 人と一緒にいる時、共通の話題をすぐ見つけることができる。		.66		
q09 見知らぬ人とでも、すぐ仲良くなる。		.69		
q78 人見知りせず、どこでもとびこんでいける。		.78		
q06 私は、周りの人の感情をどうすればうまくコントロールできるかを知っている。		.48		
F3:友人への奉仕				
q34 友達と一体感をもってつき合う。			.41	
q66 友達との間で損得の衝突が生じた時には、相手に譲る。			.47	
q42 気前がよく、お金のことでけちけちしない。			.53	
q54 友達とのつき合いでは、自分がちょっと損しても構わないと思う。			.63	
q14 友達が困っている時に力を貸してあげる。			.42	
F4:功利主義				
q47 自分に役に立つ者と積極的につき合う。				.53
q92 普段、私はできるだけたくさんのコネを作るように心がけている。				.82
q80 私は人脈を重視する方である。				.62
q32 飲食のつき合いをコミュニケーションの手段とする。				.40
因子間相関 F1		.11	.40	.09
F2			.30	.56
F3				.06

RMSEA = .06, SRMR = .06 であった。確認的因子分析に基づく因子負荷量などの指標は Table 1 の通りである。項目の日本語と中国の対訳は Appendix の通りである。

尺度の信頼性分析

Cronbach の α 係数 「相手の面子」、「社交性」、「友人への奉仕」、「功利主義」の 4 因子の Cronbach の α 係数は、順に、.69、.75、.61、.67 であった。また、ChUSSI 短縮版 17 項目全体の値は .73 であった(Table 2)。

各因子と尺度全体との相関分析 「相手の面子」、「社交性」、「友人への奉仕」、「功利主義」4 因子の得点と ChUSSI 短縮版全体得点との相関係数は順に、.45、.73、.60、.68 であった(いずれも $p < .01$, Table2)。また、因子間の相関係数は Table2 に示した。

再テスト法からみる尺度の安定性 test-retest の両方に参加した調査対象者の 4 因子および ChUSSI 短縮版 17 項目全体の得点に基づき、test-retest の相関係数を算出した。その結果、「相手の面子」因子では、$r = .73$、「社交性」因子では、$r = .82$、「友人への奉仕」因子では、$r = .73$、「功利主義」因子では、$r = .80$ であった。また、17 項目全体では、$r = .82$ (いずれも $p < .01$)であった。

尺度の妥当性に関連する分析

既存尺度との相関分析 ChUSSI 短縮版の 4 因子および ChUSSI 短縮版 17 項目全体と既存尺度との相関関係を示すピアソンの積率相関係数は、Table 3 の「／」前の値である(なお、「／」後の値は Mao & Daibo (2006)の ChUSSI 原版で示された他の尺度との相関係数である)。なお、本研究で使用した既存尺度の Cronbach の α 係数を確認した結果、KiSS-18 では、.81、ACT では、.70、JICS の察知能力(PA)では、.71、自己抑制能力(SR) では、.65、上下関係への調整能力(HRM)では、.70、対人感受性(IS)では、

Table 2 ChUSSI 短縮版各因子間・因子と尺度全体の相関係数、そして信頼性係数

	相手の面子	社交性	友人への奉仕	功利主義	ChUSSI 短縮版全体
相手の面子	α=.69				
社交性	.04	α=.75			
友人への奉仕	.24 **	.24 **	α=.61		
功利主義	.05	.41 **	.08 +	α=.67	
ChUSSI短縮版全体	.45 **	.73 **	.60 **	.68 **	α=.73

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 3 ChUSSI 短縮版全体および各因子と既存尺度との相関係数および基礎統計量

	ChUSSI 短縮版全体	相手の面子	社交性	友人への奉仕	功利主義	*M*	*SD*
KiSS-18	**.62** **	**.32** ** ／ .47 **	**.61** ** ／ .65 **	**.36** ** ／ .45 **	.25 ** ／ .27 **	3.64	0.46
ACT	**.42** **	-.10 * ／ .18 **	**.54** ** ／ .62 **	.16 ** ／ .26 **	**.35** ** ／ .34 **	5.27	1.02
PA	**.35** **	.21 ** ／ .31 **	**.30** ** ／ .35 **	.18 ** ／ .20 **	.18 ** ／ .19 **	3.63	0.62
SR	.28 **	**.37** ** ／ .41 **	.07 ／ .16 **	.16 ** ／ .13 **	.15 ** ／ .18 **	3.41	0.60
HRM	**.38** **	**.39** ** ／ .52 **	.23 ** ／ .31 **	.16 ** ／ .21 **	.19 ** ／ .19 **	3.90	0.76
IS	**.42** **	.09 + ／ .20 **	**.41** ** ／ .42 **	.22 ** ／ .19 **	.29 ** ／ .27 *	3.27	0.86
TA	-.03	-.09 + ／ -.17 **	-.05 ／ -.14 **	.06 ／ -.07	.01 ／ .02	3.14	0.84
M	5.93	7.05	5.12	6.44	5.00		
SD	0.79	1.07	1.46	1.03	1.52		

注) ChUSSI 短縮版、「相手の面子」因子、「社交性」因子、「友人への奉仕」因子、「功利主義」因子の得点範囲: 1～9 点
KiSS-18、ACT のそれぞれの得点範囲: 1～5 点と 1～9 点
JICS の PA は「察知能力」因子、SR は「自己抑制能力」因子、HRM は上下関係への調整能力因子、IS は「対人感受性」因子、TA は「あいまいさへの耐性」因子で、それぞれの得点範囲: 1～5 点
「／」前の値は本研究で得られた ChUSSI 短縮版および因子の既存尺度とのピアソンの積率相関係数、「／」後の値は Mao & Daibo (2006)の ChUSSI 原版で示されたピアソンの積率相関係数(ChUSSI 原版尺度全体の値がなかった)
本研究の結果に示された積率相関係数の値が.30 以上のものを太字にしている
** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

.65、あいまいさへの耐性(TA)では、.56 であった。

ChUSSI 短縮版 17 項目全体では、若者の一般的なスキル(KiSS-18)と相対的に強い(.62)相関関係、そして、非言語コミュニケーションスキル(ACT)(.42)や対人感受性(.42)、上下関係の調整能力(.38)、察知能力(.35)と中程度の相関関係を示している。第 1 因子である「相手の面子」では、上下関係調整能力(.39)や自己抑制スキル(.37)、そして、若者の一般的なスキル(KiSS-18)(.32)などと中程度の相関関係を有している。第 2 因子である「社交性」では、若者の一般的なスキル(KiSS-18)と相対的に強い(.61)相関関係、そして、非言語コミュニケーションスキル(ACT)(.54)や対人感受性(.41) と中程度の相関関係を示している。第 3 因子である「友人への奉仕」では、若者の一般的なスキル(KiSS-18)(.32)と中程度の相関関係を示している。第 4 因子である「功利主義」因子では、非言語コミュニケーションスキル(ACT)(.35)と対人感受性(.29)中程度の相関関係を示している。その他、ChUSSI 短縮版尺度および各因子は既存の社会的スキル尺度のほとんど(JICS の「あいまいさへの耐性」因子以外)とは、弱いであるが、有意な相関関係を示している。また、本研究で得られた相関関係の強弱を示す相関係数は、概ね ChUSSI 原版で示された値(Table 3 にある「／」の右側)と同レベルであった。

調査対象者の個人特性変数から行う尺度の妥当性の分析 調査対象者の個人特性(性別、年齢、親友の数、恋人の有無、大学での専攻)による因子得点の違いを検討するために、個人特性を独立変数に、ChUSSI 短縮版の 4 因子および ChUSSI 短縮版 17 項目全体の得点を従属変数とする対応のない t 検定を行った。結果は以下の通りである。

性差について、「功利主義」因子に有意な違いがみられた。女子大学生の得点(M = 4.86, SD = 1.55)より男子大学生の得点(M = 5.20, SD = 1.45)が有意に高かった(t (402) = 2.18, p < .05)。

年齢の違いによって、「社交性」因子での得点に有意傾向ではあるが、違いがみられた。年齢の低い群(M = 5.01, SD = 1.46)より高い群(M = 5.24, SD = 1.45)の得点が高い傾向がみられた(t (404) = 1.64, p = .10)。

親友を多く(6 人以上)もつ大学生は少ない大学生(5 人以下)とでは、「友人への奉仕」因子と ChUSSI 短縮版 17 項目全体での得点に有意(ないし有意傾向)な違いがみられた。「友人への奉仕」因子では、少ない群(M = 6.36, SD = 1.04)より多い群(M = 6.58, SD = 1.02)の得点が有意に高かった(t (382) = 2.05, p < .05)。ChUSSI 短縮版 17 項目全体では、少ない群(M = 5.87, SD = 0.82)より多い群(M = 6.02, SD = 0.75)の得点が有意傾向であるが、高かった(t (380) = 1.02, p < .10)。

現在、恋人と交際している大学生はそうでない大学生と比べて、「友人への奉仕」因子の得点が高い有意傾向(t (404) = 1.89, p < .10)にある。恋人なし群の得点は M = 6.37, SD = 1.05 であり、恋人あり群の得点は M = 6.58, SD = 0.97 であった。

大学の専攻により、「友人への奉仕」因子の得点が有意に異なっていた(t (404) = 2.35, p < . 05)。文系大学生の得点は M = 6.33, SD = 1.05 であり、理系大学生の得点は M = 6.58, SD = 0.99 であった。また、ChUSSI 短縮版 17 項目全体での得点にも同じ傾向を示している(文系は M = 5.86, SD = 0.78、理系 M = 6.03, SD = 0.78; t (402) = 2.09, p < . 05)。

考 察

本研究では、先行研究で作成された中国人大学生社会的スキル尺度(ChUSSI 原版)に対して、短縮版尺度の作成を試みた。それとともに、尺度開発時において、理論的根拠としての guanxi–mianzi モデルに由来する因子の再現可能性についても検討した。あわせて、ChUSSI 短縮版尺度の信頼性と妥当性も検証した。

短縮版の有効性と理論的な根拠の確認

本研究では、Mao & Daibo(2006)にある ChUSSI 原版の各因子から抽出した因子負荷量の高い項目を使い、開発時と異なるサンプルを用いて確認的因子分析を行った。その結果、GFI の値が.90 の基準を満たし、CFI と AGFI の値が基準値である.90 に近かった。また、RMSEA と SRMR は許容範囲の値を示し、かつ、両者の値がほぼ同じであった。これらの値から、短縮版尺度のモデルの適合度は相対的に高いと判断される。さらに、各項目の因子負荷量が.40 以上で、高い値となっている。このような結果を踏まえて、17 項目の ChUSSI 短縮版尺度は有効と考えられ、本研究の第一の目的が達成できたと言えよう。また、モデルの適合度から、中国人の対人行動を読み解くために用いられている guanxi–mianzi モデルにある「mianzi」、「guanxi」、「renqing」という 3 つの志向の存在および文化共通の社会的スキルとしての「社交性」因子との整合性は改めてデータによって裏付けられたと考えられる。よって、本研究の第二の目的も達成できたと言えよう。

尺度の信頼性の検討

本研究の確認的因子分析で確定できた「相手の面子」、「社交性」、「友人への奉仕」、「功利主義」という 4 因子の信頼性を表す Cronbach の α 係数は.60 以上で、17 項目全体の α 係数は.73 であった。Cronbach

の α 係数の値として、いずれも高いとは言い難い。しかし、一つの因子に含まれる項目の少なさ(4 ないし 5 項目)を勘案するならば、許容範囲であり、尺度の内的整合性がある程度見出されたと言えよう。また、各因子の得点が ChUSSI 短縮版 17 項目全体得点との相関係数が高いことから、因子と尺度全体との一致性があると言える。さらに、再テスト法による検討では、各因子の test-retest 間の得点において、高い相関係数(.73 以上)が示された。このようなことから、ChUSSI 短縮版には、尺度の構造的安定性があると推測される。なお、Table2 にある各因子間の相関係数の値が各因子の Cronbach の α 係数の値を超えていなかったことから、因子の弁別的妥当性もあると言えよう。これらの結果により、本研究の第三の目的の一つ、尺度の信頼性の検討ができたと言えよう。

尺度の妥当性の検討

本研究では、尺度の併存的妥当性・弁別的妥当性を確認するために、短縮版尺度の全体および各因子が既存の社会的スキル尺度との関連を検討した。また、調査対象者の属性に応じて、尺度および因子の得点の違いという観点からも尺度の妥当性を検討した。

その結果、ChUSSI 短縮版尺度全体は、若者一般の対人能力や非言語の表出能力、そして他者との間接的メッセージや感覚的メッセージのやり取り能力、さらに上下関係調整能力と関連を示した。既存の多くの社会的スキル尺度との強い相関関係があるため、短縮版尺度が「社会的スキル」を適切に測定していることが示された。また、調査対象者に親友が多くいるほど、尺度全体の得点が高くなる傾向があった。社会的スキルは人と関わる技能や能力のことであるため、友人を多く持つことは、このような能力の高さと当然相応しているとも考えられる。このような結果は尺度の妥当性を示していると言える。

一方、各因子と既存尺度との相関関係も認められた。「相手の面子」因子は、若者一般の対人能力と関連するとともに、目上の人との関係を調整する能力や自分のことを抑制する力と特に関連があった。「相手の面子」因子にある項目は、「相手を尊重すること」や「自ら謙る」などといった内容によって構成されている。目上の人との関係を調整するなら当然相手を尊重するという行動をとり、自らがへりくだるなら、当然自分の主張などを抑制する行動をするであろう。これらのことを裏付ける先行研究として、毛・大坊(2012)や毛・大坊(2016)の中国人大学生を対象とする社会的スキル・トレーニングの実証研究があげられる。そのうち、毛・大坊(2012)では、トレーニングの結果、中国人大学生の「相手の面子」因子の得点が向上するとともに、「上下関係調整能力」因子の得点も上昇した。また、毛・大坊(2016)では、「相手の面子」因子の得点が向上したと同時に、「自己抑制」因子の得点も上がった。したがって、「相手の面子」因子の得点と「上下関係調整能力」因子や「自己抑制」因子の得点の関連は偶然に本研究で見られたことではなく、先行研究と一致することであり、整合性があると言える。

また、「社交性」因子は、ChUSSI 原版において、その内容は、他文化にも存在するものであり、文化共通の社会的スキル因子として判断されている(Mao & Daibo, 2006)。一方、毛・大坊(2007)では、中国人大学生を対象に KiSS-18、ACT の社会的スキル尺度の通文化的な適用を行い、中国文化においても使用できることを確認した。すなわち、この二つの尺度は文化共通的な社会的スキルと位置づけられている。このような文脈において、本研究で得られた「社交性」因子と KiSS-18 や ACT との関連は、上記の理論的根拠によるものだと考えても妥当であろう。また、本研究の結果から、「社交性」因子は年齢の影響を受けており、年齢が高いほど得点が高くなる傾向があった。菊池(1994)では、年齢が増すと社会的スキルのレベルが高くなるとしている。本研究の結果は、この傾向を反映している可能性がある。中国人大学生サンプルにおいて、本研究で年齢の群分けの基準とした 20 歳は「分水嶺」的なものである。なぜなら、20 歳が大学二年生ないし三年生の時期にあたり、20 歳以降の大学生は全寮制の大学キャンパス生活から、就職に向けて社会での活動が始まる。その中で、すでに就職活動を開始した三年生以上の年齢高群は、人見知りせずに、積極的に他者との関係構築ができるようになったため、「初対面の他者とでもすぐ打ち解ける能力」を中身とする「社交性」因子の得点が高いと推測される。なお、この因子の年齢層に対する得点差の傾向は ChUSSI 原版で得られた傾向と一致している。

「友人への奉仕」因子は、友人との付き合いの中において、相手の利益を考えることを中心とした内容となっている。このような内容であれば、若者の一般的な対人能力を測定する KiSS-18 との相関関係があることは矛盾しないと考えられる。また、この因子は他の因子と比べて、調査対象者の様々な性質(「親友の数」や「恋人の有無」、そして「大学での専攻」)に応じて、得点がより敏感に変化している。例えば、親友の数が多い者ほど、あるいは恋人のいる者では、「友人への奉仕」因子の得点が高くなっている。多くの人と付き合ったり、恋人と交際したりしている場合には、自分の利益のみを求めるならば、その関係が破綻してしまうことが容易に想像できる。本研究の「奉仕」因子は、まさに相手の

利益を多く考える内容によって構成され、それは本人の人柄や人気度などにつながるものであり、多くの対人関係の維持の必須条件となるであろう。中国文化において、友人に奉仕することが極めて重要な要素と考えられる。

「功利主義」因子は非言語コミュニケーションスキルを測定する ACT 尺度や間接的メッセージを伝達する対人感受性と相関関係を持っていた。「功利主義」因子は、中国社会におけるコネクション作りを中心とした内容であった。コネクションを作るプロセスにおいて、非言語的な能力や間接的メッセージの伝達能力が必要とされることは経験上考えられることであろう。また、この因子には、性差がみられ、女性より男性の得点が有意に高い。中国の国土が広いとしても、多くの人口を抱えている社会において、「資源」が限られている状況が日常茶飯事のように起きている。その中では、いかに限られている資源を入手するかが各人の生活における大きな課題である。そこで、「資源」を分配する権利を有する人とのコネクションが重要となる(Hwang, 2006)。多くの場合、男性が家庭外社交の主な担い手である中国社会において、女性より男性の社交力が期待されている。本研究における功利主義の得点の性差はこのような社会事情に由来する可能性が推測される。なお、このような傾向は ChUSSI 原版においても確認されていた。

Table 3 に示されたように、本研究で得られた ChUSSI 短縮版尺度と既存の社会的スキル尺度との相関係数は、概ね ChUSSI 原版と既存尺度との相関係数の結果(Mao & Daibo, 2006)と一致している。このことから、調査対象者を変えても、ChUSSI 短縮版尺度は原版の尺度と似た性質を有することが示唆された。ただし、既存尺度との相関のうち、本研究も Mao & Daibo(2006)も、各因子が JICS の「あいまいさへの耐性」因子との相関関係がなく、あるいはあったとしても極めて弱かった。このことに関して、JICS の開発過程を示す Takai & Ota(1994)では、この因子の信頼性・妥当性の不十分さが言及されている。また、本研究で確認した信頼性係数も低かった。これらのことから、「あいまいさへの耐性」因子には検討すべき問題があり、この問題は ChUSSI および各因子がこの因子と関連しない原因だと推測される。

また、学生の専攻による得点の違いについて、検証できなかった部分があった。Mao & Daibo(2006)によると、ChUSSI 原版では、理科系より文科系の大学生の社会的スキルのレベルが高かった。また、菊池(2003)でも、将来看護や福祉関係に職に就く予定の大学生の社会的スキルの得点が、将来コンピューターや機械を対象に仕事する予定の大学生より高いことが指摘されいる。しかし、本研究の大学生の専攻による得点の違いを検討した結果、菊池に比べて概略的な分類による比較ではあるが、理科系の大学生に、「友人への奉仕」因子と ChUSSI 短縮版の得点が高く、先行研究と異なる結果となった。どうしてこのような結果になったかが本研究でのデータで解明することが難しく、今後の研究の課題とする。

以上の検証できなかった部分を踏まえても、本研究の第三の目的のもう一つ、尺度の妥当性を検討することは概ね達成できたと言えよう。

本研究の応用と限界

本研究では、Mao & Daibo(2006)で開発した ChUSSI 原版の尺度を短縮版尺度に作成することを試みた。確認的因子分析で相対的な高い適合度が得られ、理論的な因子構造を改めて確認することができた。また、Cronbach の α 係数や既存尺度との相関関係の検討から、概ね短縮版の信頼性と妥当性を確認することができた。短縮版尺度の各因子を構成する項目数は比較的少ないため、実際に使用する際にも、比較的容易に実施できるものであろう。今後、この使いやすさを活かし、中国人大学生の社会的スキルの測定(例えば、スクリーニングテストや社会的スキル・トレーニングの効果指標など)に、応用可能であると期待される。

しかし、いくつか課題も残っている。例えば、各因子の信頼性を表す α 係数は高いとは言い難いものであった。この課題に対処するため、今後、上記に言及した理論的な枠組みをベースに、因子を構成する項目内容の再検討を通して、高めていく必要がある。また、本研究および Mao & Daibo(2006)のサンプルはいずれ中国の大連という都市で得られた。国土面積が広く、地域差の激しい中国においては、「中国人大学生」という集団は多種多様な成員によって構成されているため、今後、調査地域を拡大し、改めてこの尺度を検証する必要があると考えられる。

引用文献

相川 充 (1992). 大学生における孤独感と自尊心, シャイネス, 社会的スキルとの関係 宮崎大学教育学部紀要(教育科学), *72*, 5-26.

相川 充 (1996). 社会的スキルという概念 相川 充・津村俊充 (編) 社会的スキルと対人関係－自己表現を援助する－ 誠信書房 pp.3-21.

相川 充 (1998). 孤独感を低減させる社会的スキル訓練の効果に関する実験社会心理学的研究 平成 8 年度～平成 9 年度科学研究費補助金(基盤研究(c)(2)) 研究成果報告書

相川 充・藤田 正美・田中 健吾 (2007). ソーシャルスキ

ル不足と抑うつ・孤独感・対人不安の関連－脆弱性モデルの再検討－ 社会心理学研究, *23*, 95-103.
Buhrmester, D., Furnham, W., Wittengerg, M. T., & Reis, H. T. (1988). Five domains of interpersonal competence in peer relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, *55*, 991-1008.
陈 颇 (2015). 体育专业大学生社会技能量表的研制与信效度检验 军事体育学报, *34*(1), 4-9. (日本語訳：陳頗(2015). 体育専攻の大学生を対象とする社会的スキル尺度の作成と信頼性妥当性の検討 軍事体育学報, *34*(1), 4-9.)
大坊 郁夫 (1991). 非言語的表出性の測定－ACT 尺度の構成－ 北星学園大学文学部北星論集, *28*, 1-12.
大坊 郁夫 (2003). 社会的スキル・トレーニングの方法序説－適応的な対人関係の構築－ 対人社会心理学研究, *3*, 1-8.
Friedman, H. S., Prince, L. M., Riggio, R. E., & DiMatteo, M. R. (1980). Understanding and assessing nonverbal expressiveness: The affective communication test. *Journal of Personality and Social Psychology, 39*, 333-351.
藤枝 静暁・相川 充 (2001). 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討教育心理学研究, *49*, 371-381.
堀毛 一也 (1991). 社会的スキルとしての思いやり 現代のエスプリ, *291*, 150-160.
堀毛 一也 (1994a). 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, *34*, 116-128.
堀毛 一也 (1994b) 社会的スキルを測る 人あたりの良さ尺度 菊池章夫・堀毛一也（編）社会的スキルの心理学 川島書店 pp.168-176.
Hui, C, & Triandis, H. (1985). Measurement in cross-cultural psychology: A review and comparison of strategies. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *15*, 417-433.
Hwang, K. K. (2006). Constructive Realism and Confucian relationism：An epistemological strategy for the development of indigenous psychology. In U. Kim, K. S. Yang, & Hwang, K. K. (Eds.), *Indigenous and cultural psychology: Understanding people in context.* New York: Springer. pp.73-108.
今野 裕之・堀 洋道 (1993). 大学生の対人円滑性についての研究－対人関係についての自己評価・他者評価との関連から－ 教育相談研究, *5*, 1-10.
上出 寛子・大坊 郁夫・村澤 博人・趙 鏞珍・毛 新華・高橋 直樹 (2007). 顔形態特徴の日中韓比較(2)－社会的スキルとの関連から－ 電子情報通信学会技術研究報告, *107*(241), 19-24.
菊池 章夫 (1994) 社会的スキルを測る KiSS-18 のこと 菊池 章夫・堀毛 一也（編）社会的スキルの心理学 川島書店 pp.177-183.
菊池 章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
菊池 章夫 (2003). 社会的スキルを考える 教育と医学, *51*, 4-10.
Mao, X., & Daibo, I. (2006). The development of Chinese university-students social skill inventory. *Chinese Mental Health Journal*, *20*, 679-683. (in Chinese).
毛 新華・大坊 郁夫 (2006). 中国の若者の人づきあいスタイルについての研究－自由記述調査結果によるカテゴリカルな検討－ 対人社会心理学研究, *6*, 81-88.
毛 新華・大坊 郁夫 (2007). KiSS-18 の中国人大学生への適用 対人社会心理学研究, *7*, 55-59.
毛 新華・大坊 郁夫 (2012). 中国文化の要素を考慮した社会的スキル・トレーニングのプログラムの開発および効果の検討 パーソナリティ研究, *21*, 23-39.
毛 新華・大坊 郁夫 (2016). 中国文化要素が配慮された社会的スキル・トレーニングプログラムの効果－中国人大学生の自他評価からみた意識と行動の変化を中心とする検討－ 社会心理学研究, *32*, 22-40.
Ota, H., Takai, J., & Tanaka, T. (1993). Interpersonal competence: Assessing the assessment instruments. *Human Communication Studies*, *21*, 41-63.
皿田 洋子 (2003). 臨床の場での SST 教育と医学, *51*(10), 70-76.
清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, *1*, 59-73.
園田 茂人 (2001). 中国人の心理と行動 日本放送出版協会
Takai, J., & Ota, H. (1994). Assessing Japanese interpersonal communication competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, *33*, 224-236.
田中 健吾 (2003). 職場ストレスと社会的スキル 教育と医学, *51*(10), 62-69.
庄 燕菲 (2017). 大学生社会技能类型划分及特点分析——以浙江省为例 浙江社会科学, *33*(9), 152-155. (日本語訳：庄 燕菲 (2017). 大学生の社会的スキル類型分類および特徴の分析－浙江省の例から－ 浙江社会科学, *33*(9), 152-155.)

註

1）本研究の分析に、山口大学教育学部小杉考司先生から大いにご助言いただきました。心より感謝いたしております。

The development of a shot version of Chinese University-students Social Skill Inventory (ChUSSI)

Xinhua MAO (*Faculty of Humanities and Sciences, Kobe Gakuin University*)
Ikuo DAIBO (*Faculty of Motivation and Behavioral Sciences, Tokyo Future University*)

The purpose of this study is to develop a short version of a social skills scale of Chinese University-students Social Skill Inventory (ChUSSI). ChUSSI is constructed with four factors which named Partner's Mianzi(PM), Sociability(SA), Altruistic Behavior(AB), Connection Orientation(CO). 406 undergraduate-students who are different from the sample in the development of ChUSSI were used. One month later, all of the samples were retested. A confirmatory factor analysis was done to 17 items which were extracted from original ChUSSI(4 or 5 items from each factor). As a result, index of Goodness of Fit showed high value and 4-factor construction was confirmed. The Goodness of Fit showed the rationale of short version of ChUSSI. Moreover, internal consistency of the four factors and test-retest reliability coefficients were confirmed. The significant correlation coefficients of relationships between each factor and existing scales showed the concurrent validity and discriminant validity. The effectiveness of demographic variables on the factorial scores also showed a kind of validity of the scale. Above all, we can conclude the short version of ChUSSI has validity and reliability and can be used in kinds of measurement of Chinese University-students.

Keywords: social skill scale, Chinese university-students, culture, confirmatory factor analysis.

Appendix　ChUSSI 短縮版尺度項目の日本語と中国の対訳

日本語版	中国語版
q85 相手のことを尊重するように気をつけている。	q85 我时刻注意尊敬对方。
q72 私はいつもへりくだった態度でいるように心がけている。	q72 我随时都注意保持谦虚谨慎的态度。
q75 相手の面子を潰さない。	q75 不伤对方的面子。
q25 私は相手の意見を尊重する方である。	q25 我非常尊重对方的意见。
q41 人と一緒にいる時、共通の話題をすぐ見つけることができる。	q41 与他人在一起时，我总是能马上找到共同的话题。
q09 見知らぬ人とでも、すぐ仲良くなる。	q09 即使是陌生人，我也能马上与其打得火热。
q78 人見知りせず、どこでもとびこんでいける。	q78 对人没有生疏感，在交往时能够应对自如。
q06 私は、周りの人の感情をどうすればうまくコントロールできるかを知っている。	q06 我懂得如何去调动周围人的情绪。
q34 友達と一体感をもってつき合う。	q34 我和朋友不分彼此。
q66 友達との間で損得の衝突が生じた時には、相手に譲る。	q66 在与朋友相处过程中，发生个人利益冲突时，我会把利益让给朋友。
q42 気前がよく、お金のことでけちけちしない。	q42 我很大方，在金钱方面从不斤斤计较。
q54 友達とのつき合いでは、自分がちょっと損しても構わないと思う。	q54 与朋友相处，即使自己稍有损失也不在乎。
q14 友達が困っている時に力を貸してあげる。	q14 在朋友有困难时我会尽己所能。
q47 自分に役に立つ者と積極的につき合う。	q47 对于能给自己带来利益的人，我会积极地与其交往。
q92 普段、私はできるだけたくさんのコネを作るように心がけている。	q92 平时我总是注意扩展自己的“门路”。
q80 私は人脈を重視する方である。	q80 我十分重视与他人的“关系网”。
q32 飲食のつき合いをコミュニケーションの手段とする。	q32 我把喝酒・吃饭当作与人交往的一个重要手段。